

HERBERT JHRERING

もう一度私の質問をわかりやすくいいますが、どうしてあなたは眼に見える剣を使ったのですか？こういう情景をしめすのには、あなたの暗示力では足りなかったのですか？

MARCEL MARCEAU

私どもはドラマの重要なモメントとして剣を使いました。剣はこの場合俳優でもあるのです。

HERBERT JHRERING

そうすると、動きで剣は俳優になったという・・・

MARCEL MARCEAU

そうです。ここには非常にむずかしい演出の問題がありました。つまり「暗やみの決闘」のために光と影の対立をつくりだす、ということです。ローソクをともして、客人が寝ているところでものをとられるようにしてあります。緊張がはじまるのは、宿の主人がまさしく一本の剣とローソクをお客によくみせたときです。これが重要な役を演じるぞ、ということです。ローソクは光です。主人が客の部屋へしのびこむとき、ローソクはふいに消えます。しかし舞台は暗くない。だから暗示力で闇がシンボリックにあらわれるのです。しかし剣のほうは、この瞬間、いっそう薄気味わるくなります。眼をさました客人は、とっさに誰がいるなと思いましたが、見えないので、サーベルをとり、二本の剣の闘いになりますが、それで二人の別人がはっきりするわけです。1人は恐怖にふるえており、1人は殺意に燃えている。2人とも相手をうかがい、おそろしく、身の毛がよだつのです。

HERBERT JHRERING

剣は、くらやみなので相手がみえないということ、明示することになりますね。

MARCEL MARCEAU

ときどき剣と剣がふれあって、またふいに離れるのを見ますね。それが緊張ということです。剣はときどき交わる。そのときチャリンという音がして、相手の恐怖感に効果を与えます。決闘中に旅人のほうが剣をおとし、宿の主人が床におちたその剣を足でふみつけたとき、闘いはもう決まったわけです。主人のほうがもう剣を二本持ったのですから、旅人よりずっと力と優勢を示しています。私たちはこういうプレイに冒険性をもちこみたくて剣を使ったのでもあります。あるモノをドラマティックに使うというのは、それを暗示的に使うのと同じくらいむずかしいことです。

P.78-79 「パントマイム芸術」 1971年第1刷発行 てすびす双書63 未来社
(原書1956年 Herbert Jhering・Marcel Marceau "Die Weltkunst der Pantomime" Aufbau-Verlag Berlin)

